

航、会社による接遇。第十節 船長セーリスのその後の経歴。

以上のように金井氏の翻訳がわかりやすく、それによれば、サトウはセーリスの日記形式の本文に基づきながら、自分の意図する項目を掲げて解説していることがわかります。

■日英同盟締結への環境を作って

サトウが本書を刊行した1900（明治三十三年）は、彼が義和団事件の処理のため、日本全権公使から駐清（中国）全権公使へ転出した年でした。

サトウが日本公使に就任した日清戦争以降、ヨーロッパでのロシアとドイツの動きに危機感を抱いていたイギリスと、ロシアの満州・朝鮮への南下を懸念していた日本は互いに同盟関係を模索し合い、サトウの転出後の1901（明治三十四）年から締結のための交渉に入りました。そして、翌1902（明治三十五年）年1月に日英同盟が締結されました。サトウがロンドンで紹介した、約290年を遡るジェームズ1世とジョン・セーリスの功績の話が、結果的に日本との同盟締結への理解に貢献していたのではないのでしょうか。

なお、サトウはこの日英同盟を背景にして1904（明治三十七）年から翌年まで戦われた日露戦争の決着を北京で見届け、1906（明治

三十九）年に駐清公使を退任して外交官の生活を終えました。日本勤務は通算すると約25年に及びました。

帰国したサトウは研究活動に専念し、前述のように人文系・社会科学系の分野で幾つかの日本研究書を上梓しました。この時に使われた参考文献や、セーリスの『日本渡航記』の序文作成のために収集したと思われる和漢資料も彼の日本関係コレクションに含まれ、現在はケンブリッジ大学図書館や英国図書館（大英博物館）などが所蔵しています。⁽⁴⁾

脚注と主な参考文献

- (1) セーリスの来日によって開かれたイギリスとの通商は、10年後の1623（元和九）年にイギリス側の事情で平戸商館を閉鎖し日本貿易から撤退した。その後、1854（嘉永七）年の日英和親条約締結まで、両国に国交や通商関係はなかった。
- (2) 村川氏は本書の「訳者序」において、後に本学で教鞭をとり名誉教授となった大塚高信氏が、東京文理科大学の教員時代に偶然に自宅を訪れ、文書の点検や出版社の紹介などに協力したことを述べている。
- (3) 村川堅固 訳『セーリス 日本渡航記』雄松堂書店1970年。（新異国叢書 第6巻）238-380頁。（但し、本書は『ヴィルマン 日本滞在記』と合本発行されたもの）
- (4) 小山騰「ケンブリッジ大学図書館所蔵 アーネスト・サトウ関連蔵書目録 紹介と解説」（『アーネスト・サトウ関連蔵書目録』第一巻）5頁。ゆまに書房（書誌書目シリーズ72）

おくまさよし（司書・副館長）



発信型図書館を
目指して

NIPPONALIA (ニッポナリア) コレクション データベース

Books on Japan in European Languages

西洋言語で書かれた日本研究書

本学図書館最大のスペシャル・コレクションで、アーネスト・サトウやジョン・セーリスの資料もここに含まれています